

2010年10月23日(土) 東南アジア学会関東部会報告 (at 上智大学)

タイにおける共産主義運動の初期時代(1930-1936): シャム共産党内における
ベトナム人幹部の役割を中心として 村嶋英治(早大アジア太平洋研究科教授)
murashim@waseda.jp

同名の論文を『アジア太平洋討究』第13号(2009年) pp.133-212に刊行
早稲田大学リポジトリ DSpace(早大図書館 HP) や JAIRO にてダウンロード可。

I、報告者のタイ(シャム)共産党関連研究(年代順)

- ①村嶋英治「タイ華僑の政治活動 — 5・30運動から日中戦争まで」、原不二夫編『東南アジア華僑と中国』1993年 アジア経済出版会 pp.263-364。(②はタイ語訳)
- ②『Kanmuang Chin Sayam (タイ華僑の政治運動1924—1941年)』(タイ語)、チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター研究双書第一号、1996年、237p.
- ③村嶋英治・鄭成編著『老華僑共産党員欧陽恵の回想—バンコク、延安、吉林、そして北京』(早稲田大学アジア太平洋研究センター、リサーチ・シリーズ第一号、2010年近刊予定)
- ④村嶋英治「第二次世界大戦期間の日泰同盟及泰国華僑」、『アジア太平洋討究』第7号、2005年 pp.27-59。(他に、邦文、英文、タイ文刊行済み)
- ⑤村嶋英治「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア(Nuon Chea)のバンコク時代(1942年—1950年)」、『アジア太平洋討究』第11号、2008年、pp.85-121(.英文を『アジア太平洋討究』第12号、2009年、pp.1-42に掲載、タイ文翻訳済み)
- ⑥村嶋英治「1970年代のタイ国における学生運動と共産主義」『アジア経済』第23巻12号、1982年12月、pp.24-49.

今日の報告は、シャム共産党の最も初期の時代を扱う

II、先行研究

- ①栗原浩英『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』(東大出版会、2004年)
- ② Christopher E. Goscha, Thailand and the Southeast Asian Networks of the Vietnamese Revolution, 1895-1954, Curzon Press, 1999.
- ③ Sophie Quinn-Judge, Ho Chi Minh, The Missing Years, University of California Press, 2003.

栗原浩英先生に質問したい点

コミンテルン特派員 Ly Phuc Minh、コミンテルン特派員とは
1936年在タイベトナム人組織の分裂の意味

Ⅲ、調査方法、資料(9カ国語)

1, タイ国立公文書館(NAT)

2, ロシア国立社会政治史文書館 (RGASPI, Russian State Archive of Socio-Political History)、(ロシア語資料は、島田顕先生、Konstantin 先生、ドイツ語資料はラドケ先生が協力)『報告』

3, タイ国立図書館 1920-30年代中国語新聞「副刊」、タイ語新聞

4, タイ共産党幹部の回想録発表 (例えば、Thong Chaemsri (1921 ~最後のタイ共産党総書記でベトナム人)、Chao Phongphichit (劉源泓) のタイ共産党史出版)

①, “Samphat Thong Chaemsri Lekhathikan Phak Khommiunist haeng Prathet Thai” [タイ共産党総書記、トン・チェームシーインタビュー]” in Sarakadee Magazine Vol.20 no.232 (June 2004), pp.70-88(in Thai).

②, Chao Phongphichit, “Luk Chin Rak Chat” 『週間マティション』 Matichon Sut Saphda(in Thai), 2008~2009年連載, 現在書物として印刷中。

5, 中国語 (伍治之 1905-2000、黄文歆)、ベトナム語 (Thong Chaemsri の母 Đặng Quỳnh Anh (Ba Nho) の回想録) など回想録の出版

①, 蔡誠編『兩位老共産党員奮闘的一生』2000年 (伍治之と妻蔡楚吟の伝記を長男の蔡誠が編集したもの)

②, 『泰国帰僑英魂録』第1巻~第6巻 (1989年~2007年、欧陽恵編集)

③, 中央档案馆・広東省档案馆『広東革命歴史文件彙集』1983~

④, 黄文歆『滄海一粟: 黄文歆革命回憶録』、解放軍出版社、北京、1987年 (英訳、Hoang Van Hoan, A Drop in the Ocean, Foreign Languages Press, Beijing, 1988)

⑤, Sơn Tùng, Con Người và Con Đường, Nhà Xuất Bản Văn Hóa và Thông Tin, Hà Nội, 1993, 264p. (Sơn Tùng『人と道』文化通信出版社、ハノイ、1993年) は、Đặng Quỳnh Anh: 鄧瓊英の回想。同書のタイ語訳は2009年1月に出版されたが、一部省略がある。

タイ共産党の最後の総書記トン・チェームシー (ベトナム名、Võ Thung) は、中部タイ・ピット県 Ban Dong 村を拠点に活動した、ベトナム人革命家の両親(父は Võ Tùng: 武松 = Sáu: 六、母は Đặng Quỳnh Anh: 鄧瓊英)の長男。

6, 村嶋のインタビュー

Thong Chaemsri (Võ Thung) タイ共産党元総書記

Damri Ruangsutham(藍立・榮素琛、学生時代の名は吳文利、現在は吳維實)タイ共産党元政治局員

Sophon Phiukhao, 最初のシャム人シャム共産党執行委員の4男

Chao Phongphichit (劉源泓) タイ共産党古参黨員

第I章、シヤム共産党の創立（1930年）

1930年4月20日、バンコク国鉄駅近くのホテル順記(Tunki)の一室で創立会議。2系統4者の記録一致。

中国共産党広東省委下の南洋共産党臨時委員会（シンガポール）に属するシヤム委員会の伍治之（1905-2000、1925年から汕頭で党员として活動）

ベトナム青年革命同志会ウドン省委員会の同委執委 Trần Văn Chấn（陳文振、別名 Tãng:曾, Chu:周など）、Ngô Chính Quốc（呉正国、ナコンパノム県 Ban Mai 村生、タイ語、ベトナム語、中国語堪能）

Ngô Chính Quốc 書記、Trần Văn Chấn (Tãng)：組織担当、伍治之：宣伝担当。

ベトナム人、中国人組織の統一は、30年9月。

第II章、ベトナム人共産主義者の逮捕・追放（1930年）

1930年7月14日、Lê Mạnh Trinh（黎孟楨, Tú Chính:秀正, Tiến:進など）ら30名の在 Ban Dong 村ベトナム人をスパイ殺人容疑で逮捕、ベトナム人革命家の拠点ピット県 Ban Dong 村の役割消滅。在上海越僑親愛会執行委員会(L' Association Thân Ái des Annamites émigrés à Shanghai)、在日 Cuong De 等の対シヤム政府請願

シヤム政府（プラチャーティポック王）のベトナム人革命家に対する態度・方針

第III章、第2回代表大会（1932.9.1-2）と Ngo Chinh Quoc（1932年）

第二回代表大会（Teng 書記）は海南人共産党员がマジョリティ。執行部のベトナム人は、執行委員候補 Ngo Chinh Quoc のみ。Ngo Chinh Quoc は既に書記に非ず。

シヤム共産党が1932年9月20日付けで上部機関であるマラヤ共産党中央（在シンガポール）に送ったシヤム共産党第二回代表大会に関する報告書をシンガポール英当局が入手英訳し、10月7日にタイ側に渡す。シヤムは英・仏・蘭と共産党情報の交換協定

1933年1月30日 Ngo Chinh Quoc 逮捕・自白、党組織大打撃

第IV章、第3回代表大会（1934.7.27）とベトナム人幹部の再進出（1934年）

Tang 書記 or 書記代理

シヤム共産党の東北タイ、北タイ組織はベトナム系。タイ人（暹人）を積極的にオルグしたのは、ベトナム人組織。

「1935年にコミンテルンに提出された『報告』は、1935年当時の党员数は180名で、内訳は「東北党部（越71，暹12，計83）、コーラート支部（越4，暹1，計5）、バンコク市党部（越1，華44，計45）、バーンポーン区党部（暹1，華38，計39）、ペップリー支部（華5）。チェンマイ支部（越3）合計180人」

「1932年9月の第二回代表大会直後、シヤム共産党がマラヤ共産党中央に報告した党

員数合計は325名、うちベトナム人55名、華人270名（潮州人10人余、残りは海南人）」海南人の組織が大幅減少。

「第三回代表大会において9人からなる中央委員会が選出された。すなわち民族構成では、海南（瓊州）3人、潮州2人、インドシナ3人、シヤム1人である」

シヤム人最初のシヤム共産党執行委員 Sawat Phiukhao (1908?-1971), サワットは1936年に成立したインドシナ共産党ラオス地方委員会創立者の一人（ラオス人民革命党政治局員 Samane Vignaket の記録）

モスクワへの留学生派遣、在コーラートのタイ人の Rashi (Phun Srithanrat, 1911-), 在ウドン・ベトナム人 Ratana (Tu Vu Van)

第V章、シヤム共産党とインドシナ共産党海外指導部およびコミンテルン（1935年）

中国語『報告』の末尾には、「附暹党与東党海外指揮班關係議決案（另抄）」という文が付されている。これは、1935年3月14日にマカオでシヤム共産党（劉漱石 1899-1942、Tang ら）とインドシナ共産党海外指導部（海外指導委員会）との間に合意された決定のこと（仏印当局からの情報「インドシナ共産党海外指導部・シヤム共産党代表団会議の合意事項」（仏語訳）を村嶋論文 pp. 197-199 に掲載）「泰越革命聯席會議」

NGÔ CHÍNH HỌC alias CU ĐỊCH alias CHOÁT は何者 Trần Báo (陳豹) ?

第VI章、コミンテルン特派員 Ly Phuc Minh の来暹とベトナム人組織の分裂（1936年）

1935年10月10日、Dati [Lý Phúc Minh (李福明)] 香港着

Dati 連絡先：新華書局、インドシナ共産党支援に関して見解対立、Dati は支援を止めるよう指導、Tran Van Chan (Tang) は支援継続。資金をどちらが負担するか。Dati は Le Manh Trinh (Tuchinh) と組んで、Tang を除名。但し、ベトナム人の多数派は Tang を支持。

1936年3月19日に Tran Van Chan はコーンケーンで逮捕される。

1936年4月19日に、Le Manh Trinh, Ly Phuc Minh, Sawat Phiukhao, Thong Chaemsri らバンコクで、「労働組合の発足会」で逮捕される。

「Ly Phuc Minh のパスポートから上海を通過したことが明らかになったこと、彼はモスクワから特派された共産党の代表と言われていること（「摺称該人即係来自莫斯科之共党代表」）を、早くも報じている（『民国日報』1936. 4. 20）。トン・チェームシーによれば、Ly Phuc Minh はフランスの博士号保持者であったという」

1936年10月31日コーンケーン暴動、仏印籍ベトナム人193名、仏印籍ラーオ人1名、シヤム国籍人7名、合計201名逮捕される。

在タイ・ベトナム人の革命組織、1945年まで活動停止状態に

以下拙稿「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」、『アジア太平洋討究』13号、2009, pp. 195-197「結び」

「本稿は、近年利用可能となった、シャム共産党に関する諸資料をできるだけ詳細に精査、利用することによって、ベトナム人党幹部の役割を一つの焦点に据えながら、1930年から1936年の草創期におけるシャム共産党の創立、第二回、第三回代表大会の経緯・過程、党の指導部、組織、財政、シャム共産党とマラヤ共産党、インドシナ共産党、更にはコミンテルンとの関係など、換言すれば、初期シャム共産党史を、できるだけ詳細かつ系統的に明らかにするように努めた。同時に、シャム政府側の共産主義運動に対する対応や、シャム政府と仏、英、蘭の近隣植民地政府との共産主義弾圧のための協力関係についても、詳細な具体例を示すように努めた。これらの基本的と考えられる事項も、従来は曖昧なまま放置されていたり、もしくは全く知られていなかったものが多い。

1930年4月20日、ホーチミンの仲介指導の下に、バンコクを中心にした中共南洋共産党シャム委員会下の華僑組織と、東北タイを基盤とするベトナム青年革命同志会組織とを合併してシャム共産党を創立することが合意された。初代執行部は、Ngo Chinh Quoc 書記長、Tran Van Chan 組織担当、伍治之 宣伝担当の顔触れであり、党三役中の二人は、ベトナム人という、ベトナム人の比重が高い執行部で出発した。しかし、政府の弾圧強化や内紛のため活動は低下した。

1932年9月初めに開催された第二回代表大会のため、その準備の主役を担ったのは、海南人共産党員であった。第二回代表大会で執行部入りしたベトナム人は、Ngo Chinh Quoc 候補執行委員一人に過ぎない。その彼も1933年1月末に逮捕され仏印に送還されると、仏印のスパイとなって戻ってくる有様であった。海南華僑党員がシャム共産党員中の8割を占めるという圧倒的な割合から見ても、新執行部では、海南人幹部の比重が大きかったはずであるが、現在のところ書記長はじめトップの顔触れを特定できないことは残念である。この時期の執行部は、同じく海南人が多い上部組織マラヤ共産党と密接に連絡を図った。

1934年7月に開催された第三回代表大会前後から、再びベトナム人のシャム共産党内での活動が活発化する。大会後の新執行部の三役中にも、Tran Van Chan が書記長もしくは書記長代行、Hoang Van Hoan が宣伝担当者として入った。この時期は丁度、インドシナ共産党海外指導部がマカオに開設された時期と重なり、シャム共産党とインドシナ共産党海外指導部との連絡は密になった。とりわけ1935年3月14日にはマカオでシャム共産党とインドシナ共産党海外指導部との間に聯席会議が開催され、詳細な協力協定が合意された。同海外指導部を経て、コミンテルンにシャム共産党からの報告が届けられるようになった。本稿で多用したロシア国立社会政治史文書館 (RAGSPI) の Fond 495, opis 16, delo 51 ファイル中に保存されている、シャム共産党関係文書は、このルートで送付されたものである。

シャム土着人（シャム国籍のエスニック・タイ、エスニック・ラーオなど）を獲得し、

シヤムの革命を実現することは、越僑と華僑の二者のみで発足したシヤム共産党の旗揚げ以来、最重要課題であった。東北タイ、北タイを地盤としたベトナム人の党組織メンバーは、バンコクやシヤム湾西海岸、マレー半島部を地盤とする華僑の党組織メンバーに比して、自らも熱心にタイ語学習に励むとともにシヤム人の獲得にも努力した。その成果は、第三回代表大会で、サワット・ピウカーオがシヤム人初の執行委員（中央委員）に選ばれたことや、また、ベトナム人組織が育成した、Bick (Ratana) と Pun (Rashi) のモスクワ派遣として現れた。しかし、シヤム人獲得に性急なあまり、必ずしも信頼できない人物を安易に組織に近づけたことは、スパイの潜入を容易にし、党組織の安全を大きく脅かすこととなった。

ベトナム人組織が、華僑組織に比してシヤム人獲得に熱心であった理由としては、コミンテルンの政策に忠実であったという外に、在タイベトナム人移民もしくはその子孫 (Yuan Kao) の数が、華僑に比して極めて少なく、組織拡大のためにはシヤム人に注目せざるを得なかったという環境要因も指摘できよう。

1935年7-8月のコミンテルン第七回大会における方針転換は、シヤム共産党の活動にも直ちに現れた。日本帝国主義とシヤム人民党政権内の日本派が、彼らの主要な攻撃対象となった。

1935年末にコミンテルン特派員として来暹したベトナム人 Ly Phuc Minh が、Le Manh Trinh 副書記長と結んで、Tran Van Chan 書記長を追放した内紛事件の原因は、今後の検討課題である。ベトナム人トップの対立によるベトナム人組織の分裂、その直後の3指導者の被逮捕によって、シヤム共産党内のベトナム人組織は大きな打撃を受けた。大量の越僑逮捕者を出した1936年10月31日のコーンケーン暴動は、在暹ベトナム人がシヤム政府を敵として闘った最後の公然たる闘争となった。太平洋戦争末期になって、インドシナの独立を掲げたベトミンの活動がタイでも活発化するまで、タイにおけるベトナム人の共産主義運動は表面的には姿を消した。」